空間と環境

1 空間構成

子どもたちが屋内外でのびのびと過ごせる空間

- 園舎内は1・2階中央のホールから3方向(3歳以上・3歳未満・地域)にウィングが伸びる構成とし、1階中央のホールにランチルームと職員室、2階中央のホールに遊戯・多目的室を直結させることで求心的で明快な動線をつくる。
- 職員室は一部2階ホールへの吹抜天井とし、居ながらにして2階の雰囲気が伺えるようにする。
- 北側に園舎を設け、南側の園庭(土の園庭、芝生の園庭、ケヤキガーデン)を那岐山より吹き下ろす広戸風から守る。
- 屋上園庭として設けたリングデッキと、1階のプールテラス(組立プールを設置)及び土の園庭を築山・スロープの自然な勾配で一体化する。
- 2階リングデッキの中央吹抜は、1階のプールテラスとの間で視線の交流を生むと共に、吹抜を中心に走り回り、スロープを走り下りる運動が次の遊びを創り出す意欲を生み出す。

子どもたちの発達・年齢に応じた遊びの場と生活の場の区分

- 3歳未満は保育室のテラスで上下足の履き替えを行う二足制とする。3歳以上は玄関ホールで上下足を履き替え、外遊びでは2階保育室のバルコニーで下足に履き替える三足制とする。
- 1・2歳児の保育室は南側の採光が得やすい部屋と少しおくまって光のコントロールのしやすい部屋を隣り合わせにし、食事のスペースと午睡のスペース等を使い分ける。
- 0歳児の保育室は柵付の畳の間と連続するテラス(柵付)を設け食事の後などの自由な遊びのスペースを提供する。
- 3歳以上は保育室での遊び、ランチルームでの食事、さらに遊戯・多目的室での午睡のような使い分けによって遊びの場と生活の場を区分する。

異年齢交流を促す空間

- 園舎の中心にランチルーム(1階)や遊戯・多目的室(2階)を設けることで、異年齢同士での遊びがしやすくなる。
- 3歳以上の土の園庭と3歳未満の芝生の園庭の間に菜園を設けて、異年齢同士での協働作業をしやすくする。

屋内外の密接な接続

- すべての保育室に南面するバルコニー又はテラスを設けて天然木のデッキ床で保育室との間を段差なくつなぐ。
- 遊戯・多目的室と東のデッキ、ランチルームとランチテラスも天然木のデッキ床で段差なくつなぎ、屋内外の連続使用を想定する。
- 2階渡り廊下は冬季や大雨・強風時以外は引戸を開放することで、屋根付屋外廊下とし、より屋外に開かれた空間とする。
- 園内各所で屋内外が密接に連続するにとどまらず、それらの空間が中央のホールを中心に渦を描くように有機的につながる。

変化に柔軟に対応できる可変性の高い空間

- ホールを起点に3方向にウィングを伸ばす構成により、それぞれの部門(3歳以上・3歳未満・地域)の面積増減をその長さの調整によって容易にできる。

子どもたちの“おうち”

こども園という施設をつくるというより奈義町で育つ子どもたち皆の“おうち”そのものをつくる。それはおうちでおこなわれる様々な行為への配慮を意味する。
(2F) 家事室、洗濯・湯沸室、洗濯テラス
(1F) オープンキッチン、ゴミ庫

2 階平面イメージ図

1 階平面イメージ図

2 園庭環境

からだ全体や五感を使って遊びこめる環境

- 土の園庭はリングデッキ、プールテラス、スロープや起伏のある築山で囲まれた空間構成と遊具置場、大楠の砦、砂場、様々な樹木や草花、池、水田、動物舎、菜園などの多様な構成要素によって園児にとっての小宇宙を形成する。
- これらの構成要素は園児たちの創造力によってその存在の意味を変化させる。例えば、池の水遊び、水田の泥遊び、築山芝生のスベリ台、大楠の砦の総合遊具、遊具の住居 etc.
- 土の園庭を取り囲む築山に高低の波をつくり、走り回る園児の体幹をきたえ、意欲的な遊びのための心身を育む。

動植物などの自然に対して主体的に触れ合える環境

- 雨水は貯留して散水に利用し、落葉はコンポストへ、動物舎の排泄物はバイオトイレで処理し、菜園の堆肥として再利用するなど、園庭の小宇宙に循環型エコシステムを確立する。
- 池の水は太陽光発電動力のポンプによる水の流れで浄化する。
- 芝生の園庭は、草花や小動物への触れ合いを通して自然に対して主体的にかかわる姿勢を育むために、芝生の園庭内の花壇や隣接する菜園、さらに動物舎へと徐々に深く自然とかかわれるように小さな子どもたちの自然とのふれあいの入門の場とする。
- 園全体に奈義の生活に身近な植物を植えることで、園児にとって植物園のような空間を、植物学というよりは植物愛の視点で整備する。

A-A' 断面イメージ図

郷土子ども植物園
(植物愛に基づく地域主体の植物園)
- エントランスの目印となるエノキと里山景観のヤマザクラとカキ
- 北側のコセを形づくるシラカシとサザンカ
- ケヤキガーデンの樹陰
- 土の園庭の大きな楠
- 3 本の大きなイチョウ
- 展望デッキのケヤキ
- 築山に植えるドングリの木(コナラ，クヌギ，アラカシ，スダジイ)とヤマツツジ，コブシ
- ランチテラスのモミジ
- 屋上の草場のタンポポ　　etc.

コンテクストとデザイン

3 周辺環境との連携と調和

南東側民家への配慮

- 民家に近接する東側を緑化したエントランス広場とし、3歳以上の保育室と土の園庭は南西側に配置することで、園児が遊びや生活の中で発する騒音の民家への影響を最小化する。

車の動線と駐車場・駐輪場の考え方

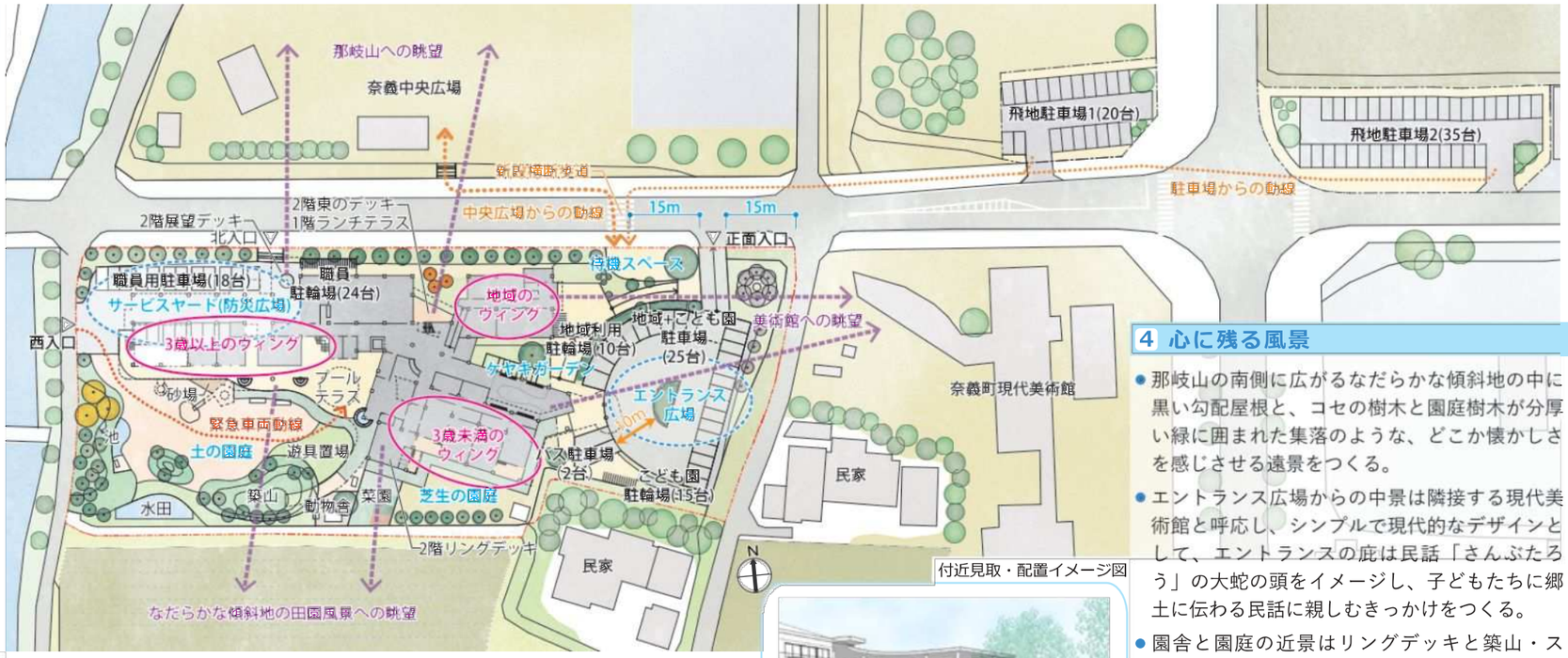
- 現在北東端部にある敷地への進入口を北側道路沿いに西に15m移動して正面入口を設け、エントランス広場に導く。ここに地域利用とこども園への来園者駐車場25台とバス駐車場2台を設ける。
- サービス車両は西入口に分離し、サービスヤードに職員用駐車場18台を設けると共に、東側の飛地に駐車場20台と35台を設け、最大100台の駐車場を整備する。
- エントランス広場に地域利用10台・こども園用15台、サービスヤードに職員用24台の駐輪場を設ける。
- 職員室内の保健スペースへの緊急車両動線を西入口から土の園庭を経て確保する。

近接する公共施設との連携(歩行者の視点)

- 北側の奈義中央広場や飛地駐車場への歩行者動線確保のために正面入口よりさらに15m西側に横断歩道を新設し、敷地内に園児の飛出し防止のための待機スペース(7m×20m)を設け、歩行者の利便性と安全性を確保する。
- 園庭は日常的な遊びの空間とし、運動会など広いスペースは奈義中央広場に求めるなど、公共施設間の積極的な連携を見据える。

街づくり拠点としての位置づけ

- 園舎を構成する3本のウィングのうち、最も正面入口に近いウィングを地域利用として位置づける。
- 子育てサロンなど若いファミリー層を中心とするコミュニティの活動拠点であると共に、多目的室を起点に園内の空間資源を活用し様々な目的別コミュニティの活動拠点とすることで、新住民を呼び込むためのメインアイコンと位置づける。



付近見取・配置イメージ図

(近景)土の園庭からリングデッキ・
築山・スロープを望む

4 心に残る風景

- 那岐山の南側に広がるなだらかな傾斜地の中に黒い勾配屋根と、コセの樹木と園庭樹木が分厚い緑に囲まれた集落のような、どこか懐かしさを感じさせる遠景をつくる。
- エントランス広場からの中景は隣接する現代美術館と呼応し、シンプルで現代的なデザインとして、エントランスの庇は民話「さんぶたろう」の大蛇の頭をイメージし、子どもたちに郷土に伝わる民話に親しむきっかけをつくる。
- 園舎と園庭の近景はリングデッキと築山・スロープで構成される人工的な起伏のある土木地形と建築(園舎)が調和することで、現代美術館やナギテラスなどの既存公共施設のデザインの特徴を継承する。
- 遠・中・近の景観が相まって、奈義町のあえて言えばこの場所にしかない、子どもたちの心に残る風景をつくりだす。

(遠景)那岐山を望む全体イメージ図

(中景)エントランス広場から園舎を望む
左：大蛇の頭のイメージのこども園玄関、右：軽快で開放的な地域玄関

理念と実践

5 安全と安心と快適

スクールバスの乗り入れ、保護者の送迎など交通への配慮

- エントランス広場の混雑を避けるために、サービス車両・職員駐車場を西側に分離すると共に、ロータリー車路の幅員を10mとし、スクールバス進入時でも円滑かつ安全な送迎を可能にする。
- エントランス広場の歩道と車路との間に緩衝緑地を設け、歩者分離に配慮する。

園舎の避難所機能

- サービスヤードは災害時には雨から守られた防災広場とし、マンホールトイレや簡易シャワーの接続口、貯留雨水からの給水口などを設ける。
- 局地的な短時間での洪水災害はどこで発生してもおかしくない状況を受け止め、2階には避難機能を想定する。
- 停電に備え、プロパンガスを利用したポータブル低圧ＬＰガス発電機を設ける。
- 断水に備え防災広場や水場に防災井戸を設け、日常的にも菜園や植栽の水やりに利用する。

閉鎖的になりすぎないセキュリティ

- ホールを中心に3本のウィングが3方向(3歳以上・3歳未満・地域)に伸びる園舎の構造により、それぞれのウィングにはさまれた園庭空間(土の園庭、芝生の園庭、ケヤキガーデン)を園舎内から見通すことができる。
- 地域と一体となった子育て文化の醸成によって、日常様々な状況で地域の人々がこども園にかかわり、オープンな言葉掛けの習慣が不審者進入の抑止力となる。
- 敷地全体をフェンスで囲うことはせず、園舎の外壁と園庭を囲うフェンスによってセキュリティゾーンを設定する。[技術提案書1/3 1階平面イメージ図参照]

安心・安全を勝ち取るための自然感-天地不仁

- 天地不仁(老子の言葉)　　天地＝自然は仁(他者を思いやれば必ず報われる)などではない。今や地震・強風・水害の危険は日本中に存在する。水害履歴のないこの地でも油断することなく安全強化を図る必要がある。屋根・屋上を漏水から守り、1FL+750の地域ゾーンを守り、さらに敷地のすみやかな水はけによって1階を守る。
- 柱・梁を鉄骨造、床を鉄筋コンクリート造、外壁を押出成形セメント板にして、重要度係数1.25に加え、あえて地震の地域係数1.0として耐震性を確保する。
- 緊急時には２階のリングデッキやテラスから、ホール階段や西階段、避難すべり台、スロープなど日常的に利用する経路を通って、安全に園庭に避難することができる。

園児の安全と安心をささえる職員の作業環境への配慮

- 適材適所に十分な収納を確保する(合計約163㎡)と共に、子どもたちにとっての“おうち”といえるような快適な空間のためのサポート機能を充実させる。
- エントランス広場の駐車場は来園者用とし、西側ピロティ部分のサービスヤードにできる限り集中して職員駐車場(18台)・駐輪場(24台)を設け、できるだけ職員が飛地駐車場を使用しなくて済むようにする。
- 2階の東のデッキに面して職員用更衣室、休憩ラウンジを設け、緊張と弛緩の切り替えによって保育に集中できるようにする。また吹抜空間による冬季の寒さ対策のために職員室も床暖房とする。

6 設計プロセス

私たちが大切にする4つのC

- 私たちは奈義町に相応しい独創的（Creativity）なこども園を創るために、行政、保護者・園児・教職員・地域、設計チームの協力（Collaboration）とコミュニケーション（Communication）がかかせないと考えています。また創造性がひとりよがりなものに陥らないように、客観的な姿勢で真理に向き合う批判的思考(Critical thinking)を重視し、設計に先立って現地調査、風土やコミュニティにかかわる学びを徹底します。

教職員、保護者、地域の設計への参画

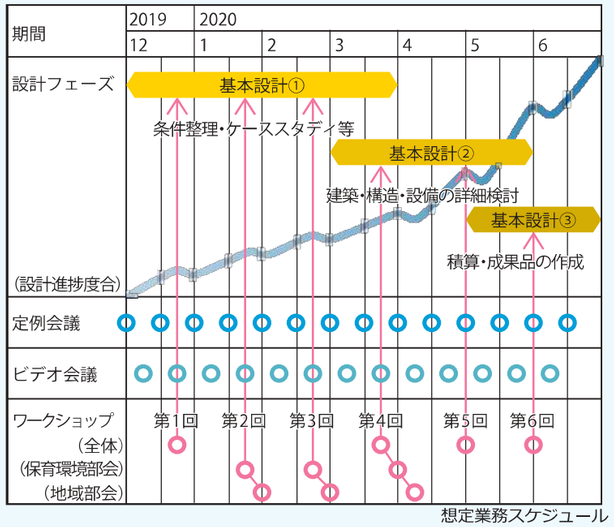
- ナギテラスや奈義チャイルドホームなど多様な場所でワークショップを実施することで、施設ごとに異なる利用者層が参加しやすい環境をつくり、活発なコミュニケーションを促進します。
- それぞれの施設で行うワークショップは明確な発展的プログラムの元に、毎回異なるテーマで実施することで、円滑に設計を進めながら確実にワークショップでの成果を設計にフィードバックさせていきます。

ワークショップのテーマ

- 全体ワークショップの他に保育環境部会と地域部会に分け、集中的に課題を協議します。保育環境部会ではこども園職員や保護者を中心にメンバーを選定し、地域部会では町職員や地域住民を中心にメンバーを選定します。

密接なコミュニケーション

- 奈義町と設計チームで2週間ごとの定例会議(大阪の事務所との距離は車で２時間)に加え、合間にビデオ会議を実施することでコミュニケーションの機会を増やし、前回会議での未決定事項への意見交換や、次回会議時までの課題の事前投げかけなど、毎回の定例会議の質の向上にも役立てます。また、ビデオ会議の奈義町側の機材は必要があれば貸与することができます。



想定業務スケジュール

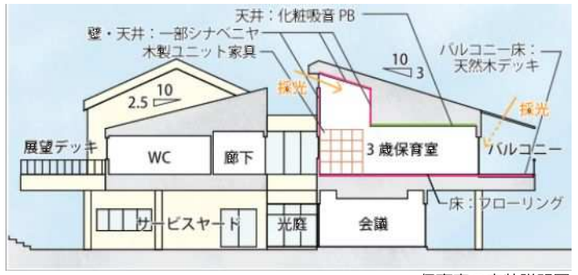
7 その他の大切にしたいこと

木の良さを活かした室内空間

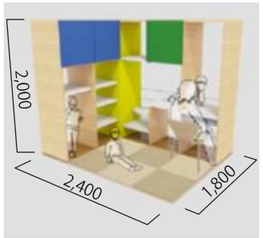
- 内装については木質化を図り、大蛇を模した建築の内部空間である玄関ホールは、天井材と壁仕上に杉板を用いて風土的なシンボル空間とする。開放的な設えとし、街づくりの視点から奈義町現代美術館への眺望も重視する。

玄関ホールからエントランス広場側を望む (左奥に奈義町現代美術館を望む)

- 保育室廻りについても建具を木製とし、要所に杉材を用い、その他の壁部分もシナベニヤ仕上げ、床はフローリングとし、木製格子のユニット家具などを利用して明るさと温かさを感じさせる木質空間とする。



保育室の内装説明図



収納 , 遊び , 教師コーナーを兼ねた木製ユニット家具のイメージ

保育室の内装 (シナベニヤ) のイメージ

園児の発育にふさわしい音環境

- 保育室など居室間の音漏れ防止に配慮し、天井裏を含む界壁部分を遮音仕様とすると共に、天井材として化粧吸音石膏ボードを使用し、音の響かない保育環境をつくる。

	吸音率 (250 ～ 500Hz での平均値)
化粧吸音 PB (空気層 100)	0.56
岩綿吸音板 (捨張り PBt9.5)	0.30

吸音性能の比較表

予算厳守の姿勢

- 本体工事1,000,000千円、外構工事100,000千円、ピロティ駐車場の割増40,000千円、家具25,000千円、設計・監理80,000千円の総工費1,245,000千円(税込)を想定するが、町の意向を反映した上で決定される上限額を厳守する。